

## はじめに

博物館の使命には、資料の収集と保管、歴史や文化財の調査と研究、資料の展示・公開と普及・活用といった様々な業務があります。なかでも資料の収集と整理業務は、博物館活動にとって基礎的かつ重要な作業です。横浜市域および周辺地域の歴史や文化財の調査研究・収集保管・展示公開などを目的とする当館でも、資料整理には力を入れて取り組んでまいりました。

その成果として、当館ではこれまでに、『横浜市歴史博物館資料目録』を第32集まで刊行しています。そしてこのたび、第33集として、都筑区並木家文書、及び同区信田家文書の目録を刊行いたします。

貴重な資料をご寄贈いただきました、ご所蔵者の皆様に感謝申し上げます。

また横浜市歴史博物館では、次集以降も、当館が所蔵・保管する市域および周辺地域に関する資料について、順次調査・整理を進め、目録を公開してまいります。広くご活用いただけましたら幸いです。

2025(令和7)年3月

横浜市歴史博物館

館長 佐藤 信

## 凡 例

- 1 ここに収録した資料の目録は、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 横浜市歴史博物館が行った調査・整理した結果をまとめたものである。
- 2 本資料の目録の番号・分類などは、原則として以下の既刊目録に倣った。並木家文書は、『横浜市史料所在目録 第7集 緑区』（横浜市総務局編刊 1982年）。信田家文書は、神奈川県史編集室編『神奈川県史資料所在目録』第26集（緑区、1971年）、および横浜市総務局編『横浜市史料所在目録 第7集 緑区』（横浜市総務局編刊、1982年）。ただし、同一文書内に複数の資料が含まれていた場合、枝番号をつけた。
- 3 原則として文書の原題を表題とし、原題のないもの、原題のみでは内容が判然としないものは、（ ）を付し仮表題および補題をつけた。
- 4 年代が明示されていないもので、内容などから推定できるものは、（ ）内に推定年代を付けた。
- 5 破損・虫喰などのため判読ができない箇所については■で示し、解読不能の文字は□および[ ]で示した。また、前欠・後欠などについてはくゝに記した。
- 6 本書に掲載する文書の整理は、石崎康子、鈴木美奈子が担当し、編集・解題は小林紀子（当館主任学芸員）、仲泉剛（当館学芸員）が行った。

## 資料解説

### 並木家文書(武蔵国都筑郡佐江戸村)

並木家は、近世には佐江戸村(現、都筑区)の名主を勤めた旧家である。同家に残された資料については、横浜市歴史資料研究会による「横浜市内歴史資料実態調査」の成果をまとめた『横浜市史料所在目録 第7集 緑区』(横浜市総務局編刊 昭和57年(1982))に纏められている。今回、追加資料11点を借用し、合わせて調査をおこない目録に追加した。

佐江戸村は、多摩丘陵の東縁部にあり、鶴見川に恩田川が合流する付近に位置する。近世は都筑郡に属する。江戸から7里、東西18町・南北20町余。村高は幕末期に547石余で、家数79軒である(「旧高旧領取調帳」)。村内には中原街道が通り、大柵村(現、都筑区)・川井村(現、旭区)の両村と組合で伝馬役を負担した。

資料全体としては、近世中期から明治初期にかけてのものが中心である。特に、年貢関係は、元禄13年(1700)から慶応3年(1867)まで体系的に伝来しており、これらの分析を通じて村落構造の変遷を追うことが可能である。

もっとも古い資料として、寛文11年(1671)の「覚(中原街道往還の人馬継立につき、中山村より訴え出るにつき規定条々)」(状1)がある。これは、寛文11年(1671)に佐江戸村と中山村(現、緑区)との間で起きた中原街道の人馬継立をめぐる裁許状である。裁許の結果、中原街道の人馬継立場(宿場)は、小杉村(現、川崎市中原区)・佐江戸村・瀬谷村(現、瀬谷区)・用田村(現、藤沢市)の4か所という判決が幕府から下されている。これと関連して、追加資料1「[手形](籠舎之儀)」も同年(1671)4月に作成されたものである。残念ながら、前欠資料であり、解読することは難しいが、川井村と大柵村の名主が数か村の間屋と幕府の評定所に宛てており、中原街道に関する一件資料とみえる。いずれも近世前期の中原街道に関する資料として重要である。また、元禄11年(1698)「[水帳](分郷に罷成、北村季吟様御知行に相渡り候分)」(冊1)は、新たに旗本北村氏知行となった分の知行付百姓とその所持田畑が書き上げられており、貴重である。

### 信田家文書(武蔵国都筑郡川和町)

武蔵国都筑郡川和村(横浜市都筑区川和町)の村役人を勤めた信田家に伝来した資料群。平成30年(2018)に当館に寄贈された。

川和村は、近世初期は幕府直轄領で、2代将軍徳川秀忠の妻・崇源院(お江)の化粧料だった。崇源院の死後、寛永9年(1632)に増上寺御霊屋料となった。崇源院逝去の際は、村役人はじめ百姓たちが剃髪し、棺を担いだという伝承が残っている。

本史料群は、①神奈川県史編集室編『神奈川県史資料所在目録』第26集 緑区(1971)および②横浜市総務局編『横浜市史料所在目録』第7集 緑区(1982)に、すでに纏められている。①には、a)冊30点、b)「正帳」8点、c)冊(御用留類)8点、d)冊(年

貢取立帳)13点、e)冊(国役など)8点、f)冊(年貢駄賃帳)7点、g)冊(年貢諸勘定帳類)8点、h)冊(金銀割合帳)5点、i)冊(金銀出入関係)17点、j)「状の部」11点が掲載されている(a~lは便儀上筆者が付した)。一方②には、a)、i)、j)に一致する「諸帳」30点、「金銀出入帳」17点、「状」11点および、①にはない「冊(追加)」3点、「状(追加)」12点が掲載され、b)~h)は掲載されていない。

このうち、当館に寄贈いただいたのは、①掲載史料に②掲載の「追加」史料を加えたものであった。そこで本目録では、基本的に①の分類に従い、「A」「B年貢(1)」「C支配」「D年貢(2)」「E」「F年貢(3)」「G年貢(4)」「H」「I」「J状」、続けて②の「追加」にあたる「K冊(追加)」「L状(追加)」の順で掲載することとした。また、新たに発見された断簡は「追加」として一括し、末尾に加えた。さらに、①、②に内容が記されていない資料について、枝番や内容の追記を行い、本目録に反映させている。所収史料は全132件147点となった。

年代のわかる範囲では、近世期、さらにいえば19世紀の資料がほとんどである。分類別としては、年貢関係の文書が比較的多い。天保8年(1837)「年中日誌」、同15年(1844)「甲辰日記」は、いわゆる「信田日記」として『緑区史』(通史編、1993)や『図説 都筑の歴史』(2019)などにも取り上げられており、村の農事・生活・歳時記を伝える資料として貴重である。

御用留も享和3年(1803)、文化12年(1815)、安政2年(1855)、文久3、4年(1863、64)、慶応2、3年(1866、67)、明治2年(1869)と残されており、江戸時代後期、ことに幕末動乱期の村の支配の様相を知ることができる。また増上寺に納める施餓鬼用の竹についての廻状など、増上寺領ならではのものもみられる。

当館では、川和村の資料群としてほかに前田潤家資料を所蔵(寄託)しており、さらに昨年発行の目録第32集掲載の河原家文書、今回の第33集に同時掲載されている並木家文書など、横浜北部地域の文書群が近年充実してきている。これらの資料群から今後、近世の横浜市域北部の村々の様相を、より豊かに描き出せることが可能であろう。

横浜市歴史博物館資料目録 第33集

発行日 令和7年3月

発行者 (公財)横浜市ふるさと歴史財団

横浜市歴史博物館

〒224-0003 横浜市都筑区中川中央1-18-1

TEL 045-912-7777(代)